

祝辞

中野貴志

大阪大学核物理研究センター長



日本原子力研究開発機構の皆様、そして先端基礎研究センターの関係者の皆様、本日は先端基礎研究センターの設立30周年を迎え、心よりお祝い申し上げます。この特別な日に祝辞を述べる機会を頂き、大変光栄に感じております。

先端基礎研究センター（ASRC）は、日本における出口を見据えた基礎研究を実践する場として非常にユニークな位置づけにあります。基礎科学の充実はイノベーションの源泉として不可欠であり、そのためには効率のみを追求しない、curiosity drivenのボトムアップの研究、そしてgoal orientedなトップダウンの取り組みと、その二つの融合が必要ですが、先端基礎研究センターはこの二つのアプローチを見事に統合し、原子力科学の分野で顕著な成果を上げてきました。

これらの成果を生み出した研究の特徴を一言で表すならば、枠を超えるということではないかと思います。例えば原子力先端核科学分野では、ハドロン、原子核、原子という物質の三つの階層を解明する研究が、階層間の境界を自由に行き来しながら進められています。また、原子力先端材料科学分野では、トポロジカル物性の解明から新規材料の開発まで、基礎と応用を自由に行き来しながら進められています。そして、すべてを束ねる理論物理が分野間横断型の議論を進めることで、新しい概念や手法の発展を促進しています。

ASRCは発足当初から研究を支える人材に関しても、大学との間の壁を低く保ち、多くの研究グループで大学の教員や学生たちが所属機関を意識せずに一丸となって研究に取り組む環境を提供してきました。このように外部に開かれた組織形態は、国際共同研究を行う上で大きな強みとなっております。ASRCの自由かつ独創的な研究文化は、他の大学や研究機関にも大きな影響を与えています。私が所属する核物理研究センターでは原子核よりも小さな階層、サブアトムと呼んでいますが、その階層の一つであるハドロンに関する研究が主要な研究テーマとなっております。この研究分野の発展はASRCの初代センター長である伊達先生の深い理解と支援により、SPring-8の蓄積電子リングにレーザー光を照射し、その逆コンプトン散乱によって生成される高エネルギーガンマ線ビームを利用する研究グループの設立によって始まりました。

今後、私たちが直面する社会課題がより困難かつ大規模になるにつれて、基礎科学や人材育成の重要性は一層増していきます。ASRCはこれらの課題に対し効果的な解決策を提示する可能性を持っています。また、そのユニークなアプローチは、課題解決の過程で新たな学理の確立や新しい分野の創出を促進すると思われます。技術立国としての我が国の未来を形作る上で、ASRCの役割はますます重要になっていくと考えます。私はASRCがさらに進展を遂げ、私たちの未来の生活や環境に対して、貢献し続けることを確信しています。

最後に先端基礎研究センターの30周年を祝し、先端基礎研究センターの皆様、そしてご参集の皆様の健康と今後の研究の成功をお祈り申し上げます。